は只見るばかりで、其水は多くは汚れて居る。村から村へ越える時によく知れるが、其水上は皆田の溝である。村の人々は何れも嶮岨な阪路を攀ぢて、此岡の上の田を作るので、國府平野の二三大字を除けば、一戸當りの田地の廣いのは此邊だらうと思ふ。清水掛りで排水が十二分に良い爲か、米の質も優良なものが多く、他村に供給する量も少なくないと云ふことである。

海から見たのみだから正確には知らぬが、熊野の南端にも佐渡とよく似たシーテレースが續いて居る。伊豆の西海岸でも松崎から土肥近く迄、同じやうな地形が見られるが、伊豆では村里も海岸より遠ざかり、田地のある平面に構へられたものが多かつたやうに記憶する。海府の村では一二の例外を除き、何れも渚(なぎさ)に臨んで低く住み、時としては如何にも窮屈に通路も無くたて込んで居るのが、或は偶然に此等の里人の以前の境遇を語るものであるかも

知れぬ。

三

併しながら住居の所在ばかりでは判斷は出來ぬ。自分の見た所では、少なくとも現在に於ては、半農半漁と迄も謂ひ難い。第一には浦に繫いだ船の數が少ない。漁業權は此島では概して沿海の村に割渡して居るが、住民は共同に又は平均に之を利用して居るのでは無い。肥料には海村だけに海の物を使ふらしい臭氣がするが、必要缺くべからざる程度では無いやうだ。要するに此だけの田地を經營するには、假令海に臨んで住んでも、海へ出るだけの人手は剩りさうにも無い。其に又勞力利用の季節が重複する。田地が雪の下になる頃は海も荒い。折角冷たい水で採つた物も、運び出す方法が如何にも容

易で無い。そこで考へると、夏分灘の靜かな頃に大に稼ぐべき漁業と、米の栽培とは兩立せぬ筈である。從つて漸次に漁から農に、移るならば移つてしまふべき傾向がある。あまり農業的であるから海人の末ではあるまいとは言ひ難い。其斷定には今少しく別の材料が必要なやうである。

灌漑の自由な岡の上野が、農業への誘因であつたと同時に、一方には漁業からの壓迫も考へられぬことは無い。其一つは漁獲の減少である。佐渡は近世多量の海產物を出したことがあるが、其が世と共に次第に減じては居なかつたか。內海の四季間斷なき漁業地と異なり、一期間の所得で年中の生活を支へねばならぬ所では、分けても豐富で無いと家計の不安を感じ易い。僻遠の地で水產を商品とする爲に、重要なるものは鹽であるが、佐渡は製鹽に付いても一般北國の不便を免れ得なかつた上に、地形の然らしむる所鹽濱の地

が多く無い。江戸時代には輸入を以つて補充をしたものか、調べて見たいと思ふが、少なくとも僅か有つた製鹽地は先度の改正法律で罷められ、今日は遠國の鹽ばかり嘗めて居る。昔に於ても地方的に鹽が得られぬとすると、或季節に偏した大漁はやはりさほどの恩惠では無かつた。何れにしても餘程の政策が後援を與へぬ以上、漁業は土著當初の條件であつたとしても、村存續の單純なる基礎とはなり難いものゝやうである。

四

然らば其ほど無理な地方へ、海部が移住して來たと見るのが誤ではあるまいか。自分の推測は實は地名が元であつて、他は後に心附いた力の弱い旁證であるが、陸人に比べて遙かに移住心の旺な彼等である。現に近い國では越

前丹生郡の海岸に、出雲から延びたらしい所謂ソリコが住み、能登西面の輪島には、海士町の部落があつて肥前の天草から來たと謂つて居る。佐渡でも相川の町の南端に海士町あり、町並が四十間、家數は二十戸足らず、天明初年の佐渡事略には、海士町は農業無し男女とも鮑を採るとあり、外海府北端の願村ですら九十餘石であつたのに、此村の草高は只の九斗五升である。相川から一里北の姫津村は、之に次で農業が少なかつた。今日は追々に耕地を買入れたやうだが、文化末年の佐渡志には、畑二町一反此高十五石三斗とあり、而も大きな邑である。是と相川の海士町との關係はまだ知らぬが、元はやはり漁民として移住して來たものらしく、當初相川より少し南の、ドロと言ふ小さな濱に住み、姫津が相川の津になつて後、保護を與へて爰へ移したものらしい。石見が本國と謂ふことで全村悉く石見氏である。漁業に關して

他村の有せぬ特權を持つて居たのは、多分は其歴史を語るものである。併し要するに此等の移住民は相川開けて後のことで、而も干鮑は長崎商賣の賣渡品と爲るよりも遙か以前から、此國重要物産の一として公にも認められて居た。小佐渡東端の前の濱には、鮑と謂ふ一村もあつて、是に基づいた地名と認められて居る。鮑ばかりは誰でも採ると云ふ譯には行かぬ。此のみでも海士部の古くから居た事を證據立てるが、しかも其鮑も今では著しく産額が減じ、之を採るべく海に潜ぐる者は、海士町にも最早居なくなつたやうである。要するに海部の職業變更は、さして珍しくも無い程、目近い實例が存するのである。さうして機會さへ與へられるならば、彼等はこんな寒い國にでも、移つて來る勇氣を持つて居たのである。

五

併し又海府が此徒の故地であり、其住民が古の白水郎の子孫であると見るには、證據が乏しいばかりか反證に算ふべきものさへある。其第一に擧げねばならぬのは、所謂カヂリ又はイタダキの風習の無いことである。此も職業と同じく變つたと謂はれぬのは、頭に物を載せることは何も漁業の勞務に限る理由が無いからで、殊に海府のやうに山阪の多く且つ急な處では、一層保存の必要が有らうと思ふのに、自分が出遇つた婦人は、悉く東部日本一般の背負ひ方をして居り、又色々と尋ねて見たが元は頭に載せたと云ふ話は無かつた。尤も肥前平戸の家船（えぶね）の者などは、もう此風を廢して居るやうだから、背負ふから海人で無いとも言はれぬかも知らぬが、兎に角に是は顯著な事實

である。第二には言語風俗に、殆ど何等の特徴も無いことで、此も私には意外な經驗であつた。家庭の生活に親しんで見たら、或は隱れたる差異を見出し得たかとも思ふが、少なくとも旅人の耳には、サロノクニ一流の訛音は國（くに）中（なか）も小佐渡も同じやうに聞えた。只注意すべきことには右のラ行とダ行との轉訛は、九州の南半に弘く行はれ、又豐後の海部などの中にも著しい。何か研究の端緒にはならぬかと思ふ。

言語などには細かに注意をしたら、海府特有と云ふべき若干を拾集し得るかも知れぬ。しかも其が海部なるが爲に此の如く、他と異なつて居るとはどうして斷定し得られぬやうである。例へば此一帶の海村では、未婚の女子をオチャーと呼ぶやうである。關東でヲエヤとかアチッコなどゝ謂ふのに相當する。オチャーは疑も無く足利時代の阿茶と同じもので、宮も藁屋も以前は

是で通用して居たものが、改良の必要も無くて此邊だけに殘つたのであらう。生活上の慣習も亦この通りで、たま〳〵他の村では之を笑ひ若くは珍重する程に變化して居ても、其は單に偏卑の地が一種の保存場なることを意味するに止まり、容易には之を海部史の資料と認められぬ。婦人の勞働者などで折折著て居るのを見た臂までの刺子袢纏は(名も聞いたが忘れた)、今では恐くは海府以外の地では見られまいが、此等は近い昔まで島民の一般に用ゐて居たものである。之に就いてふと思ひ出したのは、曾て越前から美濃の根尾谷へ越えた時に、根尾の宿を眼の下に見る岡の端の地藏堂に、常に幾つかの山袴が脱いで置かれるといふ話を聽いた。其は奥在所の女たちが市に出て來るのに、爰迄は山村の風俗を保ち、町では笑ふから之を脱ぐので、自然に一つの境堺線が出來たのである。處が那須から會津の方へ行けば、女でも平氣で

まだモッペをはいて居る。新しい平地々方の流行でも、仕來りと便利とを征服するのは無造作で無い。種族の異同を見出す標準としては、今一段と古くから行はれ、しかも一段と自由に取捨し得た風習を求めねばならぬ。

建築などにも目に著く程の特徴は有つたが、是は殊に變化の階段が分るから、海府の今の樣式が佐渡一般の昔の形であることは推測し得られた。地割などの制肘の無い限は、茅葺の入母屋でも、板屋の切妻でも、元は同じ建て方であつたものが、自然に些しづゝ新しい番匠の作略の加はつたことがよく知れる。さうして海府には比較的純な形が遺つたのである。卽ち平入りの稍廣い間口を、正しく三つに切つて中央を公式の入口とし、多くは向つて左の一方を勝手口として居る。爐は中央の板敷の中程に在り、普通奥の間は僅かに寢所が有るのみで、未だ所謂四間通りの住居には發達して居らぬ。是は恐

くは岡に據り、南又は西に向いて家作りをする場合の、尤も自然な形であらう。自分が見た日向の山村でも、又相州津久井の奥でも此通りであつた。納戸の生活が其では如何にも陰鬱だから、必ず將來は急激に改められるだらうと思ふが、今ならばまだ國中の村々にも、右申す如き用心と禮義とを主とした廣間、及び其後に隱れた最も謙遜なる帳臺の中世式を見ることが出來る。但し此建て方では板葺又は瓦葺の場合、殊に低くて外觀が見すぼらしいので、近頃は盛に二階作りにする風が行はれて居る。二階作りは勿論維新後の變化であらう。海府だけにはまだ一向に其變化が入つて居らぬので、注意して觀察せぬと或は是も根本的の特色に算へたくなるかも知れぬ。之を要するに中世以降の混淆であるか、はた又昔から同一の種屬であつたかは別の問題として、少なくとも近代の生活には完全なる同化があつた。其同化から更に發足

した最近の進歩には、交通其他の事情から、多少の遲速が見られると云ふのみである。

六

考へて見れば何れの地方も同じことであるが、佐渡の如き手頃の一つの島に對して見ると、如何にして人が來て住み始めたかの問題が殊に考へられる。地方官の子孫などは流人の後裔も同樣に、評判ほどは繁殖を助けて居らぬに相違ない。さすれば島民の中堅を爲すものは、一元であるか、はた又逐次に各方面から集まつたかと云ふことになる。土佐の男と能登の女と、落合つて夫婦になつたと云ふ昔話はあるが、あれは稻の種類の一番古いものに、其名が有るのから發生した傳說らしい。肅愼人が來て漁をしたことが日本紀にあ

る。神に憎まれて空しく白骨を留めたと語られて居るが、或は北隅の靜かな灣に、多少は安住し得た者が有つたかも知れぬ。地形が其樣な想像をも許すのである。さうで無くても計畫を以て大規模な移民をした形跡は見られぬから、假に後れて此島に到著した一團が時々有つたとしても、必しも排斥又は壓迫を受くること無しに、土著開發を爲し得る餘地は隨分有つた筈である。而うして昔の平民の婚姻慣習はまだ十分には分つて居らぬが、丸々の見ず知らずが別々に作つた村ならば、假令偶然に磯山を隔てゝ相隣接して居ても、其間の交通と混淆とは自ら少ないだらうから、或は將來の個人測定に由つて、存外濃厚に種族の特性を留めて居ることを見出すかも知れぬ。漠然たる觀察で豫言にもなりにくいが、鷲崎附近の海府の奥へ向ふほど、後部へ著しく發達した圓頭の多いことゝ、西北に面した外海府の數部落には、圓頭でしかも

面長な上品な顏だちの多かつたことゝが、注意せられずには居られなかつたのである。

そこで自分の假定說を大膽に述べて見ると、此島へもやはり或時代に、海部の漂泊者が辿り著いて居る。先入の見に捉はれて居るのかも知らぬが、海府と云ふ外稱は偶然には起るまいと思ふ。第二には此種族の遠征力の旺盛で、現に日本海の多くの荒濱にも、別に政廳の介助などを須たずに、移住した前例の有ることである。それには能登の舳倉島（へくらじま）に對する輪島の海士町の如く、最初は越後の岩船に來て住み、爰を根據として其から往來したことが、二國に相對して各々海府の地を存する原因かも知れぬ。第三には佐渡島の漁獲の豐かなこと、殊には蝑の多く取れたと云ふ點である。地曳網や磯釣だけならば海岸に住む人民は皆遣るが、水に潛る作業は今日でもまだ專門の技藝にな

つて居る。此島に限つて其が常人の村に發達したとは思はれぬ。併し現在最早此が行はれぬのは如何かと申せば、洋海を移動してあるく魚族と異なり、貝類などは殊に生産力が枯渇し易く、又盛衰に一の週期が有るとすれば、其週期は頻繁に輪轉する道理である。此が恐くは海部の漂泊性を助長した一の事情であつて、一旦定住の境涯に入つた者に在つては、例へば人一代ほどの間、生産の減少期が續けばもう親の技能を子に傳へ得ぬこと、恰も伊豆の天城が御獵地になつて三十年もたゝぬのに、麓の人民に猪害を防ぐだけの鐵砲打ちも無くなつたのと同じであらう。しかも佐渡の外海には山の幸も豐かであつた爲に、いつと無く水清く日暖かな臺地を拓いて、米を作つて食ふやうになり、漁業者としては一流でも二流でも無くなつたものであらう。其改造に對する大なる便宜は、後地がすぐに高山で、奥に入込んでも前住民の利害

を異にする者が無かつたことである。若し此邊の在所に地頭と同系の農民が居たなら、魚や蚫はよく買つてくれても、木を伐り綠肥を刈り牛を放ち水を引くには、きつと大々的な故障を入れ、終に海部をして第二の浦濱を捜索せしめたかも知れぬのである。

佐渡には國人の崇敬する三座の靈山がある。中央の金北山が第一で、南の小佐渡には經塚山、北の海府には光明佛がある。光明佛寺は一に山居とも稱し、東西南北四筋の參詣道は、共に海府の村を山口として居る。即ち海府の信仰生活の爭者無き中心であるが、而も此山の開基は關東にも馴染の深い相州の彈誓上人で、慶長十四年に六十三で死んだ行者である。即ち此寺の出來なかつた足利期の終までは、浮世の人には何の用も無い別天地であつたので、更に相川の後の山に光る寶の出る以前は、言はゞ海士でも無ければ居られぬ

地方であつたかも知れぬ。今日では事情が既に變化した。自分の如き好事者流の外に、島人に取つても「海府めぐり」は年中行事の一である。願の賽の河原には何百體の石佛がある。路傍の立石にも國中と同じく、光明眞言の供養塔が多い。此三百年の同化力の後に於て、猶三日四日の旅に昔の面目を見出さうとするのは、或は性急に失した研究心かも知れぬ。後の學者に委託するの他は有るまい。

（大正九年八月、歴史と地理）

熊野路の現狀

熊野路の現狀

大和の初瀬の觀音の後から吉隱名張を經て伊勢へ詣る路は、僅かの年數ですつかり衰微した。汽車が出來て人が足を厭ふやうになつたら、忽ちにして阿保山峠の上の伊賀茶屋と伊勢茶屋とは泉も石垣も草に埋もれ、梅の古木が殘つて居るばかりである。然るに此三四年前から、春の好い季節になると遠方の人では無いが、若い者などがわざと汽車に乘らずに、遊び半分に此山路を、打連れて伊勢詣りする事が段々盛になつた。當世の語で言ふと卽ち遠足である。山や谷川が自然に開いた通路は、さう容易くは滅びて了ふものでは無い一つの實例で、聊か心强い感がする。併し自分等のやうな者が此路を通

ることになると、假令日數の掛るのは構はぬにしても、車が通ふか荷持があるかゞ先づ大きな問題である。麓まで來て引返さねばならぬやうでは困るから、地圖の上では計畫が立てにくい。殊に紀州路は昔も今も入口が東西に一つ宛しか無くて、沿海が七十里以上ある。あんな汽船でも之を當にせぬことにすると、眞に袋の底へ入つたやうなもので、出て來る事が骨折だ。よつて新しい自分等の經驗に由つて、玆に當分用の案内記を拵へて置かう。

自分達は和歌山の方から入つた。汽車で南大和の古山川を見ながら往かうとしたのは先づ失敗であつた。大阪から和泉の濱を電車で行く方が奈良經過の關西線より半日以上早い。和歌山市の停車場には黒江行の電車が來て待つて居る。此城下町の今の形勢と、紀川水運の樣子、及び和歌浦と紀三井寺の所謂名勝地が何ほどの物であるかは、此車の中から見て行けば十分である。

陸運に引附けられて柑類の栽培が次第に和歌山の方へ寄つて來ることも一目して察せられた。新しい木新しい種類は市に近い處ほど多い。黒江と日方は家續きの長い一筋町である。總體に山が迫つて外に路線の取りやうもないから、漁家も商家も悉く所謂長汀曲浦に沿つて構へられてある。併し里を出離れると昔の熊野路は直に境の山を越えやうとする。車の路は其立石を左にして濱へ濱へと成るだけ急に阪に懸らず、且つ成るだけ多くの里を貫かうとする。里は概して小さな灣に臨んで居るのである。だから新道は快活であるが、以前の山路は同じ海と遠い國とを望むにしても、山の梢越しで遙かに幽艶の趣に富んでゐるだらうと思ふ。併し磯の浪音を近く聞くのも決して惡くは無い。偶人家の無い山の陰などになると鴨が來て浮いてゐる。鹽津の靜かな湊には暮のことであるから、蜜柑を積む汽船が來て繫つて居る。路の都合で此

町は家の屋根を遙か下に見て通る。字峯と云ふ處に人力車の立場がある。黒江の電車は鹽津まで延びる豫定になつて居るが、果してどこを通つて來るものとして許されたか、自分には推測することが出來なかつた。鹽津の峯を降つて、暫くは海の見えぬ谷を横ぎり、濱中の港へ行くのである。此平地なども、昔の深い入江が追々に干潟となつたものらしく、熊野繁昌の時代には、舟でなければ通らぬ横路であつたかと思ふ。濱中の町にも蜜柑が黄金の山のやうに集り、之を撰り分けて船に運ぶ女の勞働者が其中で働いて居る。高い好い馥がする。山路になると處々の畠に、まだ採り殘された果實が見える。椒と云ふ村を右斜に見て、丘の根方を傳ふ樂な道を走つて行く。椒は卽ち端神で、自分が豫想した通りの地形であつた。浦の初島の歌を想ひ出した。それから有田川の川口の塘の上に出來て居る箕島の町まで、新路が新田の中を

眞直に貫いて居る。箕島は蜜柑輸出の中心地を以て目せられ、小舟で川を下して來る寫眞を繪葉書にして賣つて居るが、實際の光景は見なかつた。此から先は犬が人力の綱を曳く。二人曳ほど速いけれども車賃も無暗に高い。犬の勞銀も中々よい收入である。川口の長い橋を渡ると路は近頃の堤の上に附いて居る。對岸の山は餘程上流まで果樹ばかりである。其山はもとは海に面した磯山であつたのが、有田川が自分の搬出した土で、追々と裾を延ばし、殊に左岸に大分の平地を作つたと見える。沖の島一帶の丘陵は實際海中の島であつたのを、永い年代に內陸と續くことになり、其內側に水害に罹りやすい低地の蜜柑畠などが出來た。今の堤も此丘の端を便りにして築かれて居る。湯淺の盆地は僅かの高地で、此谷と水脈が分たれてゐる。玆にも短距離の輕便鐵道が企てられ、糸我の村はづれに少しばかりの工夫が働いて居た。まだ

盛土も滿足で無いのに、停車場の建物ばかりが田の中に手持無沙汰に立つて居る。電話と電燈と電車とを、無邪氣な此邊の人は文明の全部と解して居る。しかも其動力の採用に附いては、中世式に孤立して居るから妙だ。

湯淺は寢心地の良い靜穩な町であつた。旭日の出て來る日高境の山を眺めて、どの邊を越えるのかと思つて出たら、川上に存外奥深い谷が入込んで居た。谷の口は南廣村の井關と云ふ部落で、此水で廣い田を作つて居る。それから津木と云ふ長い村を通るのである。昔の路も多分此筋であらう。良い路だが淋しいもので、人力車などは頓と出逢はない。右の方へ分れて由良へ越える新道が、味も模樣も無く同じ勾配ですつと山を切つて登る。此方は猶更車が往くことを欲しないと云ふ。序に言ふが此邊で車を曳く犬は、先年月ヶ瀬で雇つた犬などから見ると遙か小さい。都會でならチンチンをして遊んで

居る奴である。カメ中の紈袴子弟である。此も車夫と同じく年々其品質に於て退歩して行くのでは無いか。かよわい者の勤勉力行は傍で見るのが隨分大儀である。津木の谷は僅かの山脈を右に隔てゝ居るのに、早些かも海邊の氣分がせぬ。車夫などは此邊のやうな山家(やまが)ではなどゝ言ふ。村の犬は妙に耳の立ち尾の卷いた白狗が多く、頻に來て車の犬に威壓を加へる。其あとから鐵砲を持つた村の人が來て叱る。それは皆猪を擊ちに行くのです。此邊ではもう猪が捕れるのかい。ヘイ仰山居りまするなどゝ話しながら、鹿瀬(ししがせ)峠の隧道に向つて登つて行く。トンネルの口は日高郡東内原村の原谷である。此も頗る深い入野であつて、降り降つて廣い耕地になると、御坊の町の松原越に海がチラリと見え、遠淺であるのか汽船が沖の方に來て繫つて居る。御坊はまだ大きく成りさうな町だ。縣首府の勢力が次第に弱くなるものか、町に獨立

して新聞がある。田邊に行けば二つ、新宮になると四つ新聞を出して居る。町の新聞を見る人が恐らく同時に此等の町を繁榮せしめる御客で、出入の商船は寧ろ其御出入の商人であるらしい。其爲か否かは知らず、縣道はあまり埠頭とは交渉せずに、左へ切れてさつさと日高川の長い橋を渡り、我々に熊野路を捗らせてくれる。玆でも清姫の越えたのは大分上流のことであらうと思ふ。此邊から濱が荒くなるからか、漁事を活計にして居るらしい民家までが、ずつと海から引込んで高みに住んで居り、路は流を越える爲に何度と無く登り降りする。大體に於て手の屆いた好い路だが、前年の出水に損じた處を二處ばかり歩かねばならぬ。印南は小ぢんまりとした港だけれど、奥在所が淺い上に砂を出す川が邪魔をする。此頃の切目川は谷が深いだけに持出す砂も多く、其砂を西の風が汰り上げて所謂由良の地を作つて居る。印南から

此へ越えるには坂が稍長い。其坂の一部分の些し切通しになつた處が、有名な切目王子である。切目と云ふ語も或は此地形を意味するのかも知れぬ。東國で言へば卽ちウトウ坂である。切目王子は今は切目明神と唱へて居る。熊野の九十九王子の衰微は、必ずしも我々が笈や頭陀袋の趣味を忘却した結果では無い。熊野を西國三十三番の打ち初にした時代にも、既に王子の社は三つに一つしか殘つて居なかつた。野中とか近露とか近い頃に合祀せられた王子も甚だ多い。結局昔が多きに失したので、今が少なきに失するので無いと言へばそれ迄であるが、古い國に來て古いものゝ無くなつたのを見るのは、南方さんで無くても決してよい心持はせぬ。切目の濱村から、又切目崎の續きの山を越える。淋しい山路である。雨が降ると寒いけれどもやがて新年と云ふのに草紅葉が殘つて居る。岩代の里中には梅も菜花も咲いて居る。岩代

の早豆と云つて、既に蠶豆が花盛である。有馬皇子の結松の古蹟も此邊にちがひない。荒海の滸であるが故に、殊にあの歌の悲しみが身に沁みた。高野の蓮華王院の文書で、夙くから名を聞いた南部庄は、思ひの外の新しい町であつた。爰でも昔の船津の跡は、ずつと川上の方に求めねばなるまい。岬の路も新しく開けたものらしく、之を廻ると最早熊野の國であるが、今では何等の氣分の變りも無しに、安々と熊野に入込んで行く。後の山々は迫つて居ても灣内が廣くて、渚に沿うた町と松原とを、忘れる程通らねば田邊には達しない。田邊の船着は秋津川の川口に近く、舊城の一角を僅かの模樣替をして用ゐて居る。城の構は幾分か備後の鞆津に似て居り、東國には珍しい形式である。城の要害なら寄り附き難い方がよろしい筈である。海運を主とする近世の都會の利害が、その昔の軍略上の利害と調和し得たのは不思議である。

但し自分は大阪商船の營業ぶりを見て聊か發明をしたことがある。獨占の勢力は大きいもので、打捨てゝ置いても客の方から賴んで來る。即ち客は熱心な寄手であるから、石垣を築いて置いても攀ぢ登るかも知れぬ。和歌山から田邊へは二十五里、犬に曳かせても二日かゝる。數箇の輕便鐵道を掛けるだけの資本家か政治家かで無ければ、とても犬の車賃を負擔することがならぬ。田邊から東へ向いては其犬にさへ別れねばならぬ。併し是が爲に大に陸運を改良しようと云ふ策略はどんなものであらうか。古來最も勇敢なる船方を出した熊野が、これでは空しく海に降伏したことになる。自分等が若し熊野人なら、寧ろ進んで航路を味方に引込み、是を我物として存分に變更利用して見たいと思ふ。

（大正三年二月、鄕土研究）

峠に關する二三の考察

峠に關する二三の考察

一　山の彼方

ビョルンソンのアルネの歌は哀調であるけれども、我々日本人にはよく其情合がわからない。日本も諸威に劣らぬ山國で、一々の盆地に一々の村、國も郡も村も多くは山脈を以て堺して居るが、その山たるや大抵春は躑躅山櫻の咲く山で、決してアルネの故郷の如く越え難き雪の高嶺ではない。山の彼方の平野と海とは、登れば常に見える。他境ながら相應の親しみがある。中世の生活を最も鮮かに寫して居る狂言記、あれを讀んで見てもよくわかるが、

山一つ彼方に伯母さんがあつて酒を造つて居たり、有德人が住んで聟を搜して居たりする。自分も子供の頃は「瓜や茄子の花ざかり」とか、「おまんかわいや布さらす」とか云ふ歌の趣をよく知つてゐた。其頃は小學校の新築の流行する時代であつた。どの山へ登つて見てもペンキ塗の偉大なる建築物が、必ず一つづゝは見えた。そして振返つて見ると自分の里も美しかつたのである。

二　たわ、たを、たをり

境の山には必ず山路がある。その最初の山路は、石を切り草を拂ふだけの勞力も掛けない、唯の足跡であつたのであらうが、獸すら一筋の徑をもつのである。ましてや人は山に住んでも寂寞を厭ひ、行く人に追付き、來る人に出逢はうと力めるから、自然に羊腸が統一するのである。それのみならずど

うしてこの山を越えようかと思ふ人の、考が又一つである。左右の麓を回れば暇がかゝる。正面を越えるなら谷川の川上、山の土の最も多く消磨した部分、當世の語で鞍部を通るのが一番に樂である。純日本語では之を「たわ」と云ひ(古事記)又「たをり」とも云つて居る(萬葉集)。「たわ」「たをり」は地名と爲つて諸國に存するのみならず、普通名詞としても活きて居る。鎌倉の武士大多和三郎は三浦の一族で、今の相州三浦郡、武山村大字太田和は其名字の地である。伊賀の八田から大和へ越える大多和越、其他この地名は東國にも多く、西へ行くほど猶多い。「たをり」と云ふ方では大隅の福山から日向の都(みやこ)城(じやう)へ越える小山、今は馬車の走る國道であるが、其頂上の民居を通山と云ふ。伊豫喜多郡喜多灘村大字今坊字トヲリノ山、備前邑久郡裳樹村大字五助谷字通り山、美濃惠那郡靜波村大字野志字通り澤、越後南蒲原郡大崎村大字下保

田字通坂。常陸那珂郡勝田村大字三反田字道理山等も皆是である。中國では峠を「たわ」又は「たを」と云ひ、其大部分は乢の字を當てゝ居る。乢は所謂鞍部の象形文字で、峠の字と同じく和製の新字である。内海を渡つて四國に入れば、「たを」とは言はずに「とう」と呼ぶけれども、「とう」は亦「たを」の再轉に相違ない。土佐の國中から穴内川の溪へ越える繁藤に、肥後の人吉から日向へ越える加久藤は、共に有名な峠であるが此藤も亦「たを」であらう。「たうげ」は「たむけ」より來た語だと云ふのは、通說ではあるが疑を容るゝ餘地がある。行路の神に手向をするのは必ずしも山頂とは限らぬ。逢坂山は山城の京の境、奈良坂は大和の京の境であるから、道饗の祭をしただけで、そこが峠路の頂上であつた爲では無からう。「たうげ」も亦「たわ」から來た語であるかも知れぬのである。

三　昔の峠と今の峠

「たわ」及「たをり」は今日の撓むと云ふ語と、語原を同じくして居ることは明かであるが、その「たわ」は山頂の線が一所たわんで低くなつて居るのを云ふのか、又は山の裾が幾重も重つて屈曲して入込んで居るのを云ふのか、何れとも決しかねる。新撰字鏡を見ると「嶼、山の豐かなる貌、山のみね、ゐたをり云々」とあり。又「埠、曲岸也、くま又たをり又ゐたをり」ともある。實際昔の人が山を越えるのには、頂上の低い所を求めると同時に、水の流に依つて奥深くまで、迷はず入り立つことの出來る所を求むべき道理である。谷川に沿つて上れば、自然に低い所を越えることになる。從つて「たわ」は頂線の「たわ」か山側の「たわ」か、容易に決しにくいのである。兎に角昔の山越は

深く入つて急に越え、今の峠は淺い外山から緩く越えることは事實である。大小何れの峠を見ても舊道と新道との相違は卽ち是である。峠路に限つて里程の遠くなるのを改修と云つて居る。それと云ふのが七寸以下の勾配でなければ荷を負うた馬が通らず、三寸の勾配でなければ荷車が通はぬとすれば、馬も車も通らぬ位の峠には一軒の休み茶屋も無く、誰しも山中に野宿はいやだから、急な坂で苦しくとも一日に越える算段をするのである。その爲には谷奥の山村は誠に重要であつた。關所のある峠は勿論のこと、關はなくとも難所と聞いては、西行も宗祇も此處へ來て一宿したからである。然るに新道が開けるとその村は不用になる。車屋あの村は何と言ふなどゝ聞くと、それが昔の宿場であることも屢々である。人の智慧は切通しとなり隧道と爲り、散々山の容を庭木扱ひにした揚句、汽車の如きに至つては山道を平地にしてしまつた。

四　峠の衰亡

碓氷其他の坂本の宿、越後葡萄峠の如きは麓の村も衰へたが、其後に起つた山道の衰微の方が猶烈しい。一夏草を芟拂(かるはら)はずに置けば大道も小徑になる。山水が路上を流れて或所はすぐ河原になる。會津の殿樣の參勤道路は、赤松の並木で一部分には敷石が殘つて居るのに、他の一部分はすでに谷川になつて居る。汽車は誠に縮地の術で、迂路とは思ひながら時間ははるかに少なく費用は少しの餘計で行く路があつて見れば、山路に骨を折る人の少なくなるのは仕方がない。信濃佐久郡から上州武州へ越える道は澤山あつた。碓氷のすぐ南の香坂越、中島孤島君の鄕里。其南に志賀越、內山峠。與地峠、武田耕雲齊の越えた道、その南には大日向等である。岩村田以南の人が江戸に出

で三峯に參詣するのには、決して輕井澤へ廻らなかつたのみならず、山脈の西と東と丸々種類のちがつた產物、例へば信州の米と酒、上州の麻に煙草、江戸から來る雜貨類を互に交易する爲には、少しも中山道を利用しなかつたものが、鐵道は乃ち國境の山脈を唯の屏風にし終り、甘樂(かんら)の奥の處々の米藏、佐久の馬の脊につけた三升入の酒樽を悉く閑却したのである。成程今でもちやんとした路はある。併し以前は馬主の總數に賦課した道路の修繕を、今は雙方の山口の一村が引受けるのである。ゆく〳〵は鶯の巢から四十雀の巢に變形して行くのは必然である。近江は四境悉く山であるが、隣國へ越える峠路は先づ山城へ十八、伊賀へ八、伊勢へ九、美濃へ七に越前へ六、若狹への四を合せて四十八、此中四筋は昔からの官道で、今の汽車も略之に併行して走つて居る。他の四十四の峠はとても鐵道と競爭する程の捷路では無いから、

身が輕く日を急ぐ者は、山元の山民でも出て來て汽車に乘る。恐らくは後來樵夫と物ずきとの外は通らぬ路になり、峠の茶屋は茶屋跡とでも云ふ地名になつて了ふことであらう。言ふ迄も無いが峠の閉塞の爲に、山村地方の受くべき經濟上の影響は非常に大である。山が深ければ農業一方の生活は營まれぬから、人をへらすか仕事を作るか、兎に角陣立を立直さねばならぬ。昔から山村に存外交易の產物が多かつたのは、正に道路の恩惠であつた。袋の底のやうになつてから、更に里の人と利を爭ふのは嘸苦しいことであらう。

五　峠の裏と表

旅人は誰でも心づくべきことである。頂上に來て立ち止ると必ず今まで吹かなかつた風が吹く。テムペラメントがからりと變る。單に日の色や陰陽の

違ふのみならず、山路の光景が丸で違つてゐる。見下す村里は却つて右左よく似て居つても、一方の平地が他の一方より高いとか、一方の山側は急傾斜で他の一方は緩であるとか云ふことが著しく眼につく。是は火山國だから殊にさうなのであらう。それのみならず人の仕業の裏表と云ふものが、大抵の峠にはある。麓から頂上までの路は色々と曲折して居つても、結局之を甲乙の二種に分類することが出來る。一言にしていへば、甲種は水の音の近い山路、乙種は水の音の遠い山路である。前者は頂上に近くなつて急に險しくなる路、後者は麓に近い部分が獨り險しい路である。一は低く道をつけて力めて川筋を離れまいとする故に、何度も谷水を渡らねばならぬ。他の一は此煩ひは無いが、其代り見下せば千仞の云々と形容すべき、棧道又は岨路を行かねばならぬ。峠に由つては甲種と甲種、又は乙種と乙種とを結び付けたのも

ある。殊に新道に至つては前にも云ふ通り、乙種のものが多いけれども、古くからの峠ならば一方は甲種他方は乙種である。此を自分は峠の裏表と云ふのである。表口と云ふのは登りに開いた路で、裏口と云ふのは降りに開いた乙種の路である。初めて山越えを企てる者は、眼界の展開すべき相應の高さに達する迄は、川筋に離れては道に迷ふが故に、出來るだけ其岸を行くわけであるが、いざ此から下りとなれば、麓の平地に目標を付けて置いて、それを見ながら下りる方が便である。それは第一に足が沾したくない上に、山の皺と云ふものは裾になる程多いから、上で一回廻るべき角は、中腹以下で數回廻らねばならぬ爲である。故に折角分水線の最低部に到達して置きながら、更に尾根づたひに高みへ上つた上で始めて降路を求めるものもある。即ち鞍部では十分に見通しのつかぬ處から、わざ〳〵骨を折つて乾いた小路

を搜すのである。右の如く解すれば同じ峠路の彼方此方でも、先づ往來を開きかけたアクチーフの側と、之を受け之を利用したるパッシーフの側とは分明であつて、少なくとも初期の經濟事情を知ることが出來るのである。實例を擧げても今の路が古道でないとすればむだになるが、相模の佐野川村から武藏の元八王寺村へ越える案外峠は、案外にも武藏が表で相模が裏、越中の國境莊川の上流に横はつて居る尾瀨峠は、平野地方が裏で五箇山の山村が表であるのはさもありなん。羽後由利郡の本莊西方から、雄物(をもの)川平原の淺舞横手へ越える峠は、海岸部の方が表口、肥後山鹿の奥岳間村から筑後の矢部へ越える冬野の山道は、複雜して居たが肥後の方が表だつたと記憶する。日本國の峠の數は大小一萬ばかりもあるであらう。誰か統計を取つて表を作つて見る篤志家はあるまいか。

六　峠の趣味

自分の空想は一つ峠會と云ふものを組織し、山岳會の向ふを張り、夏季休暇には徽章か何かをつけて珍しい峠を越え、その報告をしやれた文章で發表させることである。何峠の表七分の六の左側に雪が電車の屋根ほど殘つて居だなど云ふと、そりや愉快だつたらうなどゝ仲間で喝采するのである。嘸かし人望の無い入會希望者の少ない會になるであらう。冗談は拔きにして峠越えの無い旅行は、正に餡のない饅頭である。昇りは苦しいと云つても、曲り角から先の路の附け方を、想像するだけでも樂しみがある。峠の茶屋は兩方の平野の文明が、半は爭ひ半は調和して居る所である。殊に氣分の移り方が面白い。更に下りとなれば何のことは無い、成長して行く快い夢である。頂

上は風が強く笹がちで鳥屋の跡などがある。少し下れば枯木澤山の原始林、それから植ゑた林、桑畑と麥畠、辻堂と二三の人家、鷄と子供、木の橋、小さな田、水車、商人の荷車、寺藪、小學校のある村と耕地と町。こんなのが先づ普通である。だから峠の一方の側が急な方から上り、表と裏とあれば裏の方から昇つて、緩々と水に沿うて下つて來るやうに路順をこしらへることを力めねばならぬ。筑波神社の寶物に唐人の繪卷がある、聞けば卷頭には、奥山の岩本淸水、靑羅白雲猿の聲も聞ゆるやうな風景である。この水が段々と集つて淵を爲し、松と岩との間を行くと、樵夫が徒涉し、隱者が腰をかけて居る。次には溪の處に樵夫の來た徑があり、人家があつて牛が行き、更に漁舟を浮べて居る者があり、橋が架つて車が渡り、橋の下までは帆をかけた舟がのぼり、堤が低くなつて水田が廣く見え、城壁の下を流れて都府に

入れば、岸には子供が集つて輕業師の藝を見て居る。狗が尾を振つて居る。柳があつて靑樓が列り、其先は卽ち河口の港で、遠洋から歸つた軍艦商船が碇を卸して居るといふ趣向である。繪卷物の無い國の人には解し得られない興味である。併し繪なれば高々二十尺、二十五尺の、絹の上の變化であるが、天然は更に豐かである、同じ一つの峠路でも、時代及び人の生活、季節晴雨のかはる毎に、日毎に色々の繪卷を我々に示して盡きないのである。

（明治四十三年三月、太陽）

昭和七年十一月一日印刷
昭和七年十一月十日發行

秋風帖裏
定價一圓五十錢

著者　東京市柳原下谷村豆多見
柳田國男

發行者　東京市神田區北甲賀町四番地
坂口保治

印刷所　東京市神田區表猿樂町二番地
株式會社開明堂東京支店

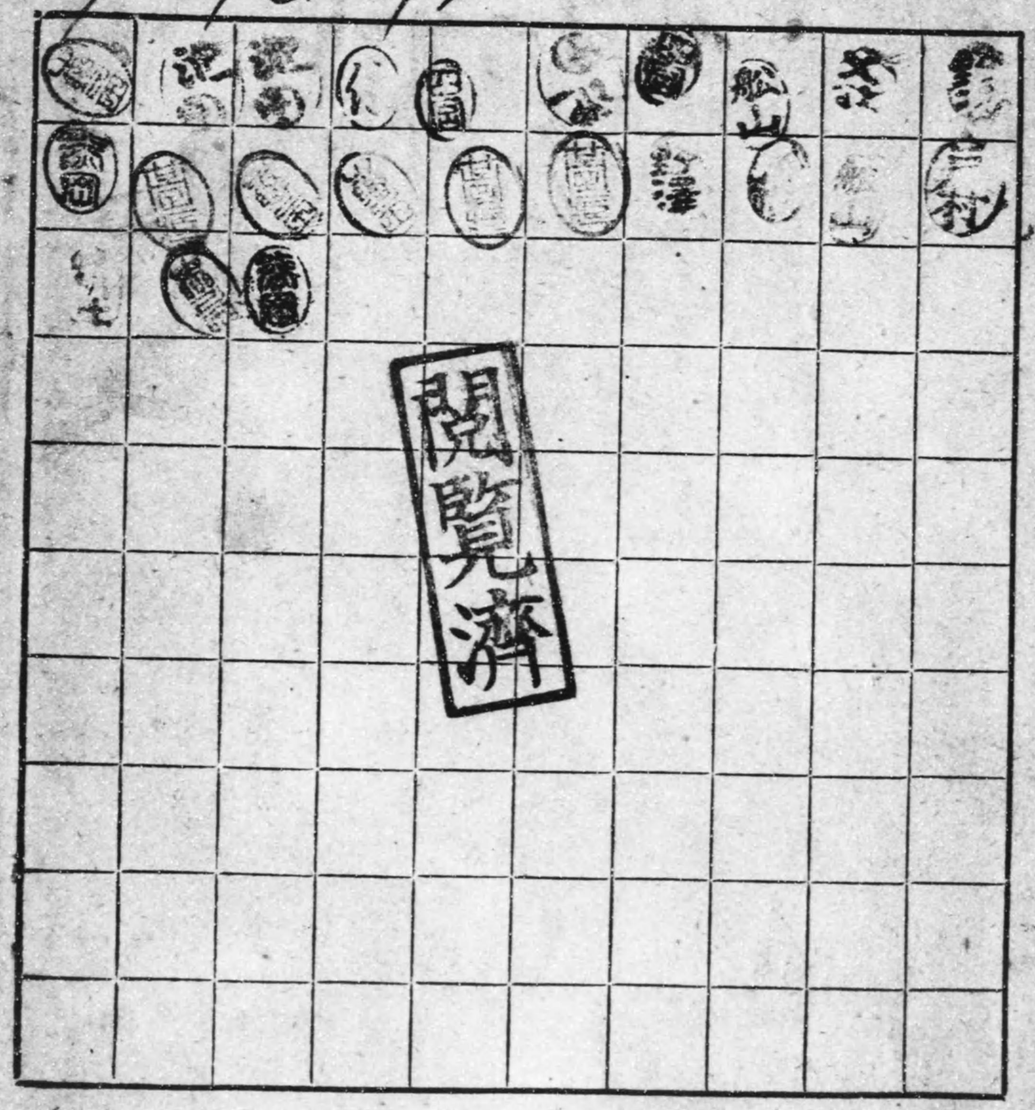
發兌　北東京市豐島區西巢鴨四丁目
株式會社あつさ書房
振替口座東京五七二八六四五番

柳田國男著作目錄

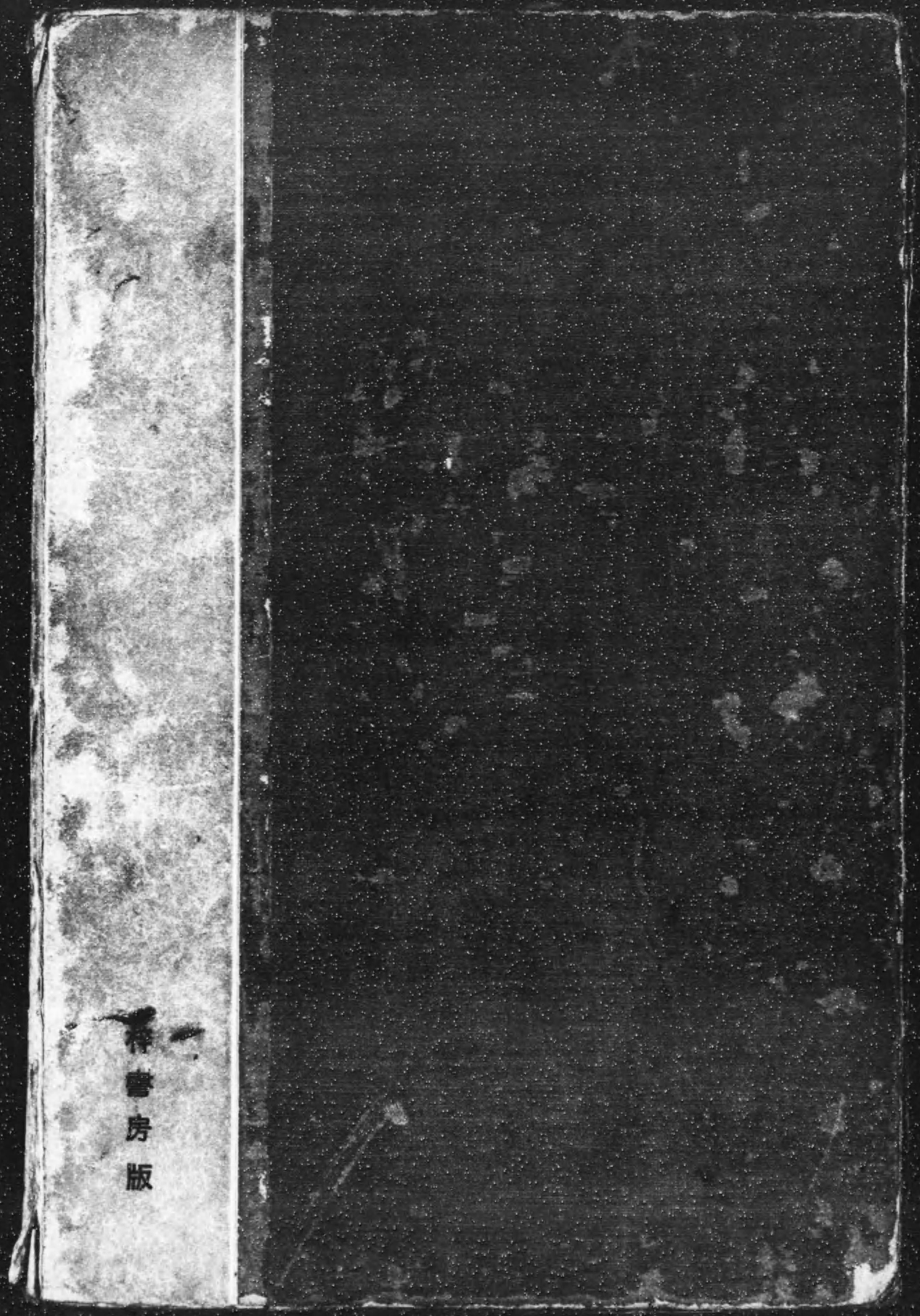
郷土誌論	大正十一年	郷土研究社
祭禮と世間	大正十一年	郷土研究社
海南小記	大正十四年	大岡山書店
山の人生	大正十五年	郷土研究社
雪國の春	昭和三年	岡書院
郷土研究十講	昭和三年	日本青年館
都市と農村	昭和四年	朝日新聞社
民謡の今と昔	昭和四年	地平社
日本傳説集	昭和四年	アルス
日本昔話集	昭和五年	アルス
蝸牛考	昭和五年	刀江書院
明治大正史世相篇	昭和六年	朝日新聞社
日本農民史	昭和七年	刀江書院
桃太郎の誕生	昭和七年	三省堂
秋風帖	昭和七年	梓書房

587
353

7年12月15日 200



閲覧済


春書房版